

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [大吉商店\(株\) 大吉牧場](#) 地域資源を有効活用し、地域から世界に羽ばたく

大吉商店(株) 大吉牧場（滋賀県）

地域資源を有効活用し、地域から世界に羽ばたく

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[株式会社](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)
 タグ | [地域飼料の活用](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



大吉牧場の牛舎内部

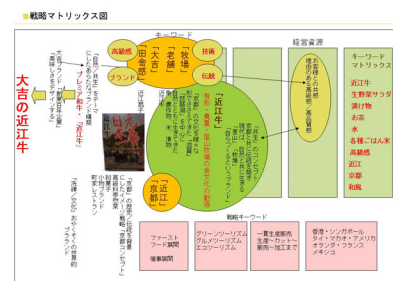
大吉商店(株)は現社長（永谷武久さん）の曾祖父・大吉氏が牛馬の家畜商として明治29年に創業した老舗で、現社長は4代目。創業以来、時代の情勢に応じて生産農場、小売店、すき焼き店などを営むが、一貫しているのが「近江牛一筋」。武久社長は、近江牛の販路を首都圏の百貨店などに拡大するとともに、途切れていた生産部門を復活させた。平成15年設立の大吉牧場で約300頭の但馬系黒毛和牛を肥育する。地域の稲わらの活用など資源循環の取り組みをPRし消費者の信頼を獲得。食肉加工・販売部門の工場で滋賀県の衛生管理制度「S-HACCP」の認定に続き、農場HACCP推進農場の指定を受けた。川上から川下まで一貫した生産管理体制を敷くなかで、消費者に満足のいく「安全・安心」を確立する。このように「地域資源を生かした展開」を前面に出し、「品質」とともに消費者に訴求することは、海外、国内販売に関わらず消費者の理解醸成の方法の情報提供として普及性のある事例である。



シンガポールに輸出する規格と同じ4等級の近江牛肉



大吉商店の食肉小売店



大吉商店の戦略マトリックス図

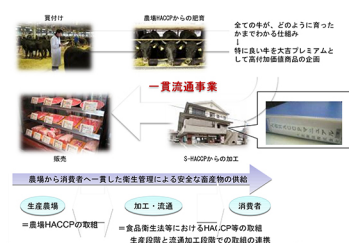


大吉牧場の看板



循環型牧場の飼養イメージ図

『大吉HACCPシステム』からの安心・安全の考え方



『大吉HACCPシステム』からの安心・安全の考え方

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (株)北坂たまご この島を生かす経営

(株)北坂たまご（兵庫県） この島を生かす経営

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[株式会社](#) 畜種（畜産経営の場合）：[採卵鶏](#)
タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



北坂たまごの北坂誠代表

(株)北坂たまごは阪神・淡路大震災の震源地、旧北淡町にある。純国産鶏（さくら・もみじ）を飼養し、年間成鶏平均飼養羽数12万羽の中規模養鶏経営である。生産部門のほか、GP センターと加工・販売部門を持っており、生産部門は個人経営の北坂養鶏場、加工・販売部門は(株)北坂たまごと経営を分離している。経営主が特に力を入れているのが「ブランディング」である。展示会にも積極的に出展し、プリンやケーキの加工品を通じて卵そのものの本質を伝える努力を惜しまない。また、養鶏場から少し離れた敷地に平飼い小屋を設置して、子どもたちを対象に食育スペースとして活用している。さらに島内の販売拡大を目的に「いとりどり新聞」を発行し、自社の卵をあげわえる飲食店や自社のイベント情報を掲載するほか、関連する島内の店主や職人などを紹介し、島を盛り上げている。飼料に地元産の魚のアラや米ぬかを加え、高品質な堆肥を地元のホームセンターで安価で販売するなど、島とともに歩む養鶏業を展開している。



育波川から養鶏場のある丘陵地方面を望む。平成16年の台風23号で川は氾濫した



鶏舎内



農協前に設置した自動販売機



消費者を魅きつけさせるきっかけの商品「たまごまるごとプリン」



食育小屋



談話スペース

取り組み主体区分：畜産経営-その3



談話スペースに飾られた小学生が描いた絵



飼育小屋に設けられた平飼いスペース



いろとりどり新聞



いろとりどり新聞



いろとりどり新聞

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (株)オクノ 地域資源の活用と純国産飼料を用いた採卵鶏経営へのチャレンジ

(株)オクノ（兵庫県）

地域資源の活用と純国産飼料を用いた採卵鶏経営へのチャレンジ

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：株式会社 畜種（畜産経営の場合）：採卵鶏
タグ | 地域飼料の活用 | 消費者等への理解醸成 | 地域を生かした6次産業化 |



商品化した「鹿児（かこ）の米育ち」

オクノは飼料の国産化を目指し、平成21年には飼料用米生産組合を設立し、自らが会長に就任して飼料用米の耕畜連携を進めている。さらに、平成23年から北海道の畑作農家と連携し、北海道産子実獲り栽培（飼料用とうもろこし）によるコーンを原料とした国産飼料原料による飼料給与を実現させている。23、24年産を利用して、1万5,000羽のうち1,000羽は完全に飼料用米と国産トウモロコシを輸入トウモロコシに代替させた通年給与体系を確立。北海道の連携先畑作農家と道内の畑作農家とをグループ化し、近いうちに国産トウモロコシ30haの作付拡大を目指している。これにより全羽を国産に置き換える計画である。国産化を進める背景には、輸入原料が高止まりする状況下にあって中小規模の養鶏業が目指せる差別化である。また、昨年6月には「加古川農家食堂」を農場脇ではなく、夕方買い物客が集まる旧市街地の市場アーケードの中に開店し、連日多くの客でにぎわっている。



平成24年6月にOPENした加古川農家食堂



店主（左）と経営主の奥野克哉氏（右）



はす向かいにある市場の買い物客向けの看板



店は加古川市街地のアーケードの中にある



一番人気の出し巻き玉子



平成23年から北海道で生産されたトウモロコシを飼料利用している



飼料用トウモロコシの子実獲りしたもの

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)広野牧場 地域の担い手育成と地域資源を活用した6次化推進

(有)広野牧場（香川県）

地域の担い手育成と地域資源を活用した6次化推進

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | [地域畜産の存続を支える担い手対策](#) | [地域資源の有効活用](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) | [ネットワーク・絆](#)



ジェラートショップ「MUCCA」のアイスクリーム

経営主の広野氏は地元JAに就職したのち、経産牛20頭で新規参入を果たした。直後に生乳の生産調整が始まり、経営状態は厳しくなるが、労働収益性の追求を第一に考え、効果的な投資とアウトソーシング化を図りながら徐々に規模拡大し、現在は経産牛260頭で、高い経営成績を収めている。育成牛は外部からの導入、飼料は全量購入（TMR）であるが、経営主は外部化により入手できる情報を重視している。例えば、飼料会社に乳量や乳質、繁殖成績、病気等のデータを提供してフィードバックし、牧場の状態にあったTMRを共同で研究し調製してもらっている。また、経営主は農業委員を務めるなど地域の担い手の育成においても重要な役割を果たしている。平成20年には地元の花弁農家といちご農家と出資して、耕作放棄地に観光農園「森のいちご」を設立し、年間2万人が来場するようになった。昨年12月には農園の敷地内に自身の生乳を使ったジェラートショップ「森のジェラテリアMUCCA」を立ち上げた。



10頭ダブルのミルキングパーラー



「モーモースクールin橋浦」の様子



フリーバーンの牛舎



「森のいちご」看板



MUCCAのロゴイメージ



広野正則さん（左）と豊さん

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)大山牧場 外的環境の変化に対応した6次産業化のさががけ

(有)大山牧場（香川県）

外的環境の変化に対応した6次産業化のさががけ

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：酪農

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [販路再興の取り組み等](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) |



大山牧場牛舎内（昭和62年にジャージー種飼養に切り替えた）

(有)大山牧場は、昭和63年にジャージー牛28頭を導入。大阪の乳業会社に出荷していたが、平成7年1月の阪神・淡路大震災を契機に生乳処理の多くを県外に依存することの危うさを感じ宅配を始めた。宅配部門での売上高は1,000万円を超えたが、その後、本業の酪農部門が手薄になり、経営全体の純利益が落ち込むことになる。しかし、地道な宅配部門の拡大によって、平成8年から香川県の大手デパートとの取引を開始。その過程で法人化も行った。宅配の拡大とともに自ら売ることを考え、アイスクリーム工房を建設し、開店。困難を乗り越え、県内の有名な洋菓子店3店との連携、プラントの設置、アーケードへの店舗出店などの取り組みを拡大させている。震災を契機として生乳出荷に係るリスクを軽減させ6次化路線を選択・拡大してきた当該経営。6次化という言葉がない時代に先進的に挑戦した実施手順とそのポイントは、現在も十分参考になるモデルである。



大山牧場で製造・販売している牛乳・乳製品



平成11年の「うしおじさん」開店時から販売している手作りパン



平成24年7月には高松丸亀町商店街にも出店した

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 秦 裕人 異業種からの新規参入で安定した肉用牛経営の構築

秦 裕人（愛媛県）

異業種からの新規参入で安定した肉用牛経営の構築

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育
タグ | 地域畜産の存続を支える担い手対策 |



平成12年に1ターンで就農した秦裕人さん

東京で土木設計の仕事に従事していた秦さんは、夫人の実家に戻り、肉用牛肥育経営を手伝う中で肉用牛の肥育技術と肥育素牛導入のポイントを体得する。その後、平成14年に農業開発公社からのリース事業で農地を取得し独立した。独立当初は乳雄肥育が主体で、回転が速く、販売差益も有利な状況が続き、所得の確保、順調な負債の償還につながった。現在は、和牛一貫経営に転換し、繁殖雌牛36頭、肥育牛105頭（外部導入含む）を飼養している。離農跡地の確保をはじめ自給飼料生産組合、飼料混合施設利用組合を活用するなどJAから多くの支援を受けているが、本人の肉用牛経営にける真摯な態度が、その支援を実現させた。全くの異業種でありながら、短期間で肉用牛の固有の技術を習得し、地域に定着し、安定した経営を構築している点に、1ターンを目指す後進に対する多くの教訓が含まれている。



牛舎は標高1000mの四国カルストにある



低コスト牛舎の内部



寺山飼料増産組合の生産ロール（200kg／個）



多頭化せずゆとりをもって健康な牛群の飼養が心がけている

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [横田 清廣](#) 雲仙普賢岳噴火災害でゼロからの再起を誓い、家族の経営参画で3億円を売り上げるブロイラー経営

横田 清廣（長崎県）

雲仙普賢岳噴火災害でゼロからの再起を誓い、家族の経営参画で3億円を売り上げるブロイラー経営

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用鶏

タグ | [過去の自然災害の発生日域で再生・復興を果たした事例](#) | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



横田さん一家

横田清廣さんは、平成2年にブロイラーの専門化に取り組み常時飼養羽数3万羽でスタートし、翌2年には5万羽に規模を拡大。しかし平成2年11月の雲仙普賢岳の噴火、翌年6月の大火砕流の発生により住宅、鶏舎、耕地を放棄、平成5年3月まで経営中止を余儀なくされた（この間は水道工事等に従事）。平成5年3月、ゼロからの再起を家族に誓い、隣町の布津町に200aの山林を借入れ、鶏舎を建設し5万羽規模で経営を再開した。現在のブロイラー羽数は被災前の3倍を上回る17万羽、粗生産額は3億円を上回り長崎県下のブロイラー粗生産額の10%を占めるに至る。各鶏舎に自動給餌器・給水装置を整備し、温度管理自動化や鶏舎内照明のLED化、ライブカメラの導入など徹底した省力化と生産性の向上を図る。この結果育成率98.5%等優れた生産成績と収益性の高い経営を実現。そして既に後継者の長男、次男が経営に参画し飼養管理で中核を担っている。



鶏舎の裏側からは雲仙普賢岳が見える



野鳥対策した鶏舎外観



平成20年にLED照明に切り換えた



平成23年に設置したライブカメラ



「あたりどり」のパンフレット

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [雲仙生乳生産組合](#) [雲仙普賢岳噴火災害から共同で農用地を集積し酪農再開](#)

雲仙生乳生産組合（長崎県）

雲仙普賢岳噴火災害から共同で農用地を集積し酪農再開

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[酪農](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



雲仙生乳生産組合の構成員、左から高原氏、井村氏、川田氏

井村正信さん、高原和光さん、川田範英さん、井村純一さんの4人は、それぞれ酪農経営を行っていたが、平成2年の雲仙普賢岳の噴火、大火砕流等の発生により被災した。住宅、施設等が避難地域であったため、搾乳牛は県内の知人酪農家の空き牛房に分散して預け、育成牛は家畜市場に運び込み泊まり込みで飼養を続けた。4人は、平成5年、雲仙生乳生産組合を設立し、震災復興等の基金事業により牛舎・施設・採草地を整備した。平成11年にはヌレ子価格が低迷したことから、共同で牛舎を建設し、肥育部門を取り入れ所得の向上も図っている。注目すべきは、作業の効率性とともに、将来を見据えたふん尿処理等環境対策に配慮した畜舎・施設用地および採草地の集積である。畜産経営が移転により再開する場合、地域環境に配慮は欠かすことのできない要素であり、当該事例にみる土地集積の活動は参考となる。



平成5年9月に撮影された雲仙普賢岳噴火による災害状況



「活火山と人との共生」をテーマに2009年8月に島原半島が世界ジオパークに認定された



土石流が民家を飲み込んだ



搾乳牛舎



堆肥化施設



乳雄の肥育牛舎

取り組み主体区分：畜産経営-その3



南島原市の位置

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [古川 繁信](#) 雲仙普賢岳噴火災害の被災に負けず、褐毛雌牛1頭の肥育から再スタート

古川 繁信（長崎県）

雲仙普賢岳噴火災害の被災に負けず、褐毛雌牛1頭の肥育から再スタート

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)

タグ | [過去の自然災害の発生地域で再生・復興を果たした事例](#) | [移転による経営再開](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [ネットワーク・絆](#)



古川さん親子（左：経営主・繁信さん、中：妻・明美さん、右：後継者・貴憲さん）

古川さんは、平成2年の雲仙普賢岳噴火災害で被災し、平成4年9月、葉タバコ経営から降灰の影響を受けない肉用牛肥育経営に転換。家電メーカーの契約社員で働くかたわら、褐毛和種雌牛1頭の肥育から再スタートした。1頭を販売しては2頭の子牛を導入する増頭スタイルを貫き、また、褐毛和種雌牛→褐毛和種去勢牛→黒毛和種雌牛→黒毛和種去勢牛と着実に自己資金を蓄え、より付加価値の高い販売物へと計画的にシフトしてきた。現在の古川さんは、黒毛和種去勢牛200頭を飼養する負債ゼロの極めて健全な経営を実践。特に肉質面で高位安定した成績を収めているが、高い技術力の習得は、同業者との情報交換や視察研修を積極的に行うとともに自ら培った人脈によるところが大きい。早くから飼料の自家配合に取り組み、大幅なコスト低減を実現。平成24年10月開催の長崎和牛全共でも名誉賞に輝くなど、後継者や仲間とともに地域振興に向けた活動を展開している。



自宅に隣接する竹藪を切り開いて確保した牛舎用地



気高系を中心に6割を熊本市場から、残りは県内からの導入を図っている



平成9年に補助事業を活用し建設した牛舎内部



第10回全国和牛能力共進会（長崎全共）での表彰式

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 小守敏子 仲間がいれば、苦しみは和らぎ、喜びは膨らむ

小守敏廣 小守敏子（宮崎県）

仲間がいれば、苦しみは和らぎ、喜びは膨らむ

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)
タグ | [口蹄疫](#) | [ネットワーク・絆](#)



小守敏廣さんと敏子さん

父の代ではブロイラー経営だったが、その後酪農経営（搾乳牛20頭）に転換し、さらに8年後に肉用牛肥育経営に経営転換した。経営主夫妻、息子の3人で、口蹄疫発生前には179頭を飼養していた。平成22年5月に200事例目の発生農場となり、179頭全頭を殺処分。8月27日の終息宣言後、11月から導入を開始し、平成24年9月末には189頭にまで頭数を戻した。さらに、11月には宮崎県肉畜共進会に出品するまでに再建を果たした。経営再建の原動力になったのが、敏子さんが所属している全国畜産縦断いきいきネットワークのメンバー等、仲間による励ましの言葉である。経営再建後は、自らの経験を同ネットワークの平成22年度大会で語り、二度と同じ悲劇を繰り返さないように訴えている。それをもとに三重県の女性畜産経営のネットワーク会員が朗読劇を作って県内の生産者へ伝えるなど、その思いが全国にも語り継がれている。



平成10年に建設した牛舎



口蹄疫の感染牛が発見された牛房には県肉畜共進会への出品牛を飼養（調査時）



牛舎前の埋却地



全国畜産縦断いきいきネットワーク平成22年度大会で自分の経験話を語る敏子さん

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 川越伸一 ブログを通じた交流で励まされ ー牛たちとの辛い別れと多くの人に支えられての復興ー

川越伸一 川越久美子（宮崎県）

ブログを通じた交流で励まされ ー牛たちとの辛い別れと多くの人に支えられての復興ー

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛繁殖
タグ | 口蹄疫 | ネットワーク・絆



川越さん夫妻

久美子さんは博多の非農家出身で、結婚してから普段の何気ない出来事をブログで語ってきた。登場するのは、母牛、子牛、飼い犬、主人、時々遊びにくる主人の甥っ子。まれに獣医が出てきて、診療や授精の様子を自らの視点で綴っていた。そんなブログをみて、田舎での牛飼いの日常に触れた人間も少なくない。平成22年5月22日、口蹄疫の被害拡大を防ぐために、全国で初めてのワクチン接種が始まる。この農場も対象農家となり、ワクチン接種後、産まれたばかりの子牛を含めて全頭殺処分となる。接種が西都市に迫る模様、その中で葛藤する気持ちをブログで描写。それを見た全国の多くの人からたくさんの応援メッセージが届く。地域の仲間、ブログでつながった応援者に支えられ、牛がいなくなった寂しさを乗り越え、再起を決意する。現在、経営主の伸一さんは、牛白血病の清浄地域づくりを目指して仲間とともに頑張っている。自身も導入牛を全頭検査している。



共同埋設地の供養塔



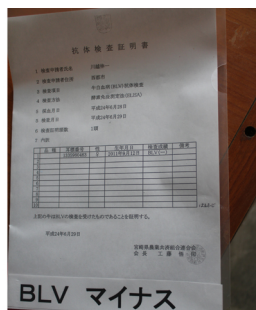
経営を再開し、平成24年9月現在、成雌牛47頭を飼養している



中古で導入した手動式のラッピングマシン



西都市に復興コンサートに訪れた歌手の泉谷しげる氏に命名してもらった「泉丸」（生後6日目）

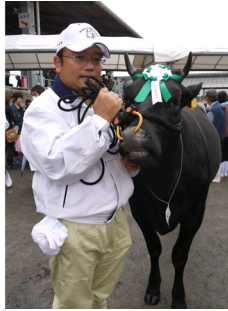


牛白血病（BLV）の抗体検査証明書



牛房を見つめながら当時を振り返る二人

取り組み主体区分：畜産経営-その3



宮崎県畜産共進会に出品した「まゆこ」



～経営主妻のブログ「気ままにウロンコロ」より
抜粋



～経営主妻のブログ「気ままにウロンコロ」より
抜粋



～経営主妻のブログ「気ままにウロンコロ」より
抜粋

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 黒木輝也 口蹄疫から経営再開し、長崎和牛全共で内閣総理大臣賞受賞

黒木輝也 黒木民子（宮崎県）

口蹄疫から経営再開し、長崎和牛全共で内閣総理大臣賞受賞

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[個人経営](#) 畜種（畜産経営の場合）：[肉用牛肥育](#)
タグ | [口蹄疫](#) | [ネットワーク・絆](#)



畜舎

黒木牧場は宮崎県西都市で肉用牛肥育経営を行っている。平成22年5月20日、市で最も早く口蹄疫の疑似患畜を発見し、家畜保健衛生所に通報した。その後、畜舎にいた198頭を全頭処分された。経営主の黒木輝也さんは40年間費やしてきたことが一瞬にして失われるショックから、殺処分の現場に立ち会うことができず、処分後2カ月はまったく仕事が見つからない状態だった。その後、近隣農家等の仲間からの励ましもあり、経営再開を決意。平成23年1月に畜舎を消毒して導入を始め、平成24年10月に長崎県で行われた第10回全国和牛能力共進会の7区（総合評価群）で優等首席に輝いた。この快挙により、被害で疲弊した地域畜産に再び活力を与える起爆剤の役割を果たしている。経営再開に至る過程で、個人的な努力はもちろんのこと、地域自体での復興力も示された事例である。



畜舎周辺の農地



受賞の告知

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)藤原牧場 口蹄疫を乗り越え自給飼料の生産拡大と6次化に取り組む肉牛肥育経営

(有)藤原牧場（宮崎県）

口蹄疫を乗り越え自給飼料の生産拡大と6次化に取り組む肉牛肥育経営

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育

タグ | [口蹄疫](#) | [地域を生かした6次産業化](#) | [ネットワーク・絆](#)



藤原牧場外観

藤原牧場は口蹄疫発生前は飼養頭数1,474頭（乳用種305、交雑種996、和牛173）、牧草地4ha、労働力は経営主、長男、従業員4人であった。現在は、飼養頭数870頭（乳用種238頭、交雑種413頭、和牛219頭）、牧草地13ha、労働力は経営主、息子、娘、従業員3人となっている。飼養頭数は口蹄疫前の規模に戻りつつあり、牧草地については3倍以上に拡大している。これは輸入飼料のような価格変動のリスクがないこと、牧草をサイレージ化することにより消化が良くなるためである。また、再生・復興期に自社牧場で精肉加工し、移動販売車を利用してイベントで小売を行う6次化の取り組みも実践している。口蹄疫により全頭殺処分という非常に苦しく悲しい経験をしたが、共同埋却場や共同肥育場の利用、市場再開後すぐの子牛導入、従業員の迅速な再雇用等、再生に向けた準備を周到かつ有意義に進めたことが早期の復興につながった。



飼育密度を低く保持



牛舎内部



移動販売車



宮崎ハーブ牛としてブランド化を図る

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)宮崎第一ファーム・(株)フレッシュワン 天皇杯受賞のわずか5ヶ月後に口蹄疫被災 復興後はさらに高品質な豚肉生産を目指す

(有)宮崎第一ファーム・(株)フレッシュワン（宮崎県）

天皇杯受賞のわずか5ヵ月後に口蹄疫被災 復興後はさらに高品質な豚肉生産を目指す

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：養豚
タグ | [口蹄疫](#) | [地域を生かした6次産業化](#) | [ネットワーク・絆](#)



精肉のほか店内で加工される40種類以上のハム・ソーセージ・そう菜類を販売

当該経営は、生産部門の(有)宮崎第一ファームが銘柄豚「あじ豚」の生産、加工・販売・直営部門の(株)フレッシュワンが直売所「ゲシュマック」を立ち上げ順調に経営拡大を続けてきた。その成果が認められ、平成21年度農林水産祭で天皇杯を受賞した。ところが平成22年5月に口蹄疫が発生し、全家畜を殺処分することになる。家畜導入・経営再開にあたっては、今までにない事故の多発など「オール初産」の厳しさを経験したが、5～6産を越える頃からようやく落ち着いてきた。その際、経営再開にあたって、適正頭数の吟味を技術面、経営面から行ったことが特筆すべきである。また、「新生養豚プロジェクト協議会」のメンバーとなり、オーエスキ病、PRRSフリーの地域の構築に取り組んでいる。併せて、信用力や直販比率の向上など、6次産業化にあたっての留意点を改めて確認した。口蹄疫を経験して、これまでの経営の実情とリスクを再確認するとともに、地域全体でみた畜産経営のあり方も指摘している事例である。



わずか5ヵ月の間に「天国と地獄を体験した」と語る山道義孝さん



経営を再開した(有)宮崎第一ファームの繁殖豚舎、分娩豚舎、子豚豚舎



被災前よりも1豚当たりの飼養頭数を減らし、ゆったり飼養している



平成18年にオープンした「ゲシュマック」

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集

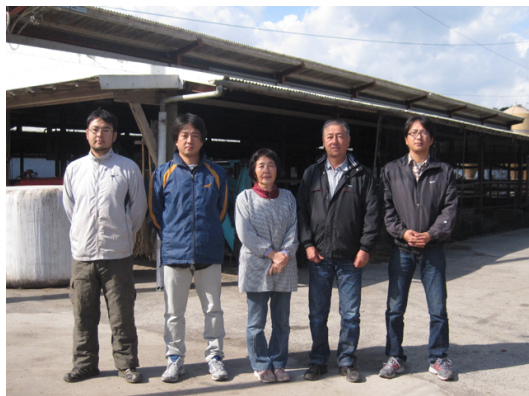


[HOME](#) > 藤岡 数雄 藤岡美江子 後継者の息子3人に経営継承を円滑に進めている肉用牛繁殖経営

藤岡 数雄 藤岡 美江子（鹿児島県）

後継者の息子3人に経営継承を円滑に進めている肉用牛繁殖経営

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛繁殖
タグ | 地域畜産の存続を支える担い手対策 |



藤岡数雄さん・美江子さんと長男、次男、三男

藤岡数雄、美江子夫妻は和牛の子牛生産を行ってきたが、家族内協業という新しい形態で息子3人を後継者として育成し、経営継承を円滑に進めつつある。現在の経営規模は、成雌牛約220頭。数雄さんと長男真澄さんで100頭、次男悦郎さんが70頭、三男勇作さんが50頭と分離して責任を負わせている。家族内協業経営として真澄さんは全体の総括と導入・廃牛、悦郎氏が飼料作・人工授精、勇作さんが哺育・清掃・去勢などを担当。経営の特徴は、飼養管理技術の高度化による省力、低コスト生産の実現である。分娩間隔は12ヵ月以内を実現しており、低コスト生産の源になっている。飼料畑は26haを確保し、団地化を図り、地域で生じる焼酎粕なども飼料として活用している。1日1回給与による昼間分娩や早期離乳などの技術、哺乳ロボットなども導入済み。また、協業体制を生かして、家族間で休日取得の調整も行っている。省力・低コスト・ゆとりある経営を目に見える形で実行してきた経営であり、このことが3家族もの就農を実現に導いた。



藤岡さんご夫妻と二人の息子さん



開放牛舎と広い運動場



頭絡の色別テープで個体管理



整然と積まれたラップサイレージ



手作り牛舎とサイレージ給与



飼槽に手作りで設置した焼酎粕給与装置

取り組み主体区分：畜産経営-その3



牛舎内の連動スタンション



揃えられた「ミニ鉄工所」の道具



平成15年に導入した哺乳ロボット

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [尾谷 重光](#) [田中 克寛](#) 親族以外の第三者に経営継承をすすめる肉用牛経営

尾谷 重光 田中 克寛（鹿児島県）

親族以外の第三者に経営継承をすすめる肉用牛経営

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：個人経営 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育
タグ | [地域畜産の存続を支える担い手対策](#) | [ネットワーク・絆](#)



経営譲受者の田中克寛さん

繁殖雌牛15頭、肥育牛35頭、子牛10頭を飼養している尾谷重光さんは、後継者がなく、一昨年に体調を崩したこともあって経営を親族以外の者に譲っても良いと考えた。近隣の牧場に勤務していた田中克寛さんを念頭に県始良・伊佐地域振興局に相談した。振興局では両氏に「農業経営継承事業」を紹介するとともに、両者の意思を確認して市、JA等からなるコーディネートチームを発足させ、同事業による1年間の研修を実施した。研修終了後は共同経営の形態をとり(形式的には譲受者は従業員)、平成28年7月に経営を第三者継承することで合意した。第三者継承の大きな特徴は、移譲者の技術、経営方針を引き継ぐ点にある。田中さんもこの点をよく理解しており、尾谷さんの「無理な投資は避け、質で勝負する手堅い経営」や「水田・耕作放棄地を利用した地域貢献」についても継承。今後は、4年間の共同経営の期間にさらなる技術等の習得を行い、資産の譲渡等の検討を行う予定である。



平成24年7月から、自分の手による牛飼いが始まった



農業経営の第三者継承を考えるシンポジウム（主催 全国農業会議所）で経験を語る田中さん

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > (有)ふくどめ小牧場 豚肉の高品質化と6次産業化を図る養豚経営 ―地域資源を生かした自家配合と特色を生かした取り組み―

(有)ふくどめ小牧場（鹿児島県）

豚肉の高品質化と6次産業化を図る養豚経営 ―地域資源を生かした自家配合と特色を生かした取り組み―

カテゴリ 取り組み主体区分：畜産経営 運営・経営形態：特例有限会社 畜種（畜産経営の場合）：養豚

タグ | [地域畜産の存続を支える担い手対策](#) | [地域飼料の活用](#) | [消費者等への理解醸成](#) | [地域を生かした6次産業化](#) | [ネットワーク・絆](#)



甘藷を食べるサドルバック

母豚300頭の一貫経営で、イギリス原産のサドルバック種という日本の他の養豚経営では飼養されていない豚も飼養（母豚30頭）。地域で生産される甘藷（コガネセンガン）を自ら釜で炊いて飼料利用することにより、地域産物の有効利用と豚肉の高品質化を図っている。ドイツで7年間の修行を経てマイスター資格を取得した次男が、平成23年に加工・販売を開始。飼養部門には経営主と長男、加工・販売部門は次男、妻、長男の嫁を配置し、家族を中心とした6次産業化を実践している。自社で加工・販売する分は、「サドルバック」100%のものと50%の交雑を「幸福豚」。農場、加工場から2kmの地点に開設した小売部門ではドイツ製法のハム・ソーセージのほか、精肉、半調理品、輸入チーズも品ぞろえする。東京や九州の展示商談会に出展し販促活動を行い、東京、大阪のレストランにも販路を拓いた。将来的には大都市に小売店を開設したいという希望を持っている。



経営主とサドルバック種



飼料の自家配合施設



地元農家からの甘藷（コガネセンガン）



窯で煮た甘藷（「はん」）



「全国ふるさとうまいもん市」のテナントとして出店した「豚に真珠館」



左側がチーズの平台ケース、右側の2段ショーケースはハム・ソーセージと精肉・半調理品の構成。ドイツのデリカテッセン店を意識した売り場づくりである

取り組み主体区分：畜産経営-その3



ふくどめ小牧場のハム・ソーセージ



緑に囲まれた加工場

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > (有)ふくどめ小牧場 地域の養豚経営と歩んだ復興——自身の農場再建の取り組みや食肉製品販売店舗が直面した課題、被災地域の活性化に向けた活動など

(有)中野目畜産（福島県）

地域の養豚経営と歩んだ復興——自身の農場再建の取り組みや食肉製品販売店舗が直面した課題、被災地域の活性化に向けた活動など

カテゴリ 取り組み主体区分：[畜産経営](#) 運営・経営形態：[特例有限会社](#) 畜種（畜産経営の場合）：[養豚](#)

タグ [東日本大震災からの再生・復興に向けた活動](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) | [地域を生かした6次産業化](#) | [ネットワーク・絆](#)



自社直売所『ノーベル』

福島県泉崎村で母豚300頭規模の一貫経営を行い、自ら生産した豚肉を加工して直売所「ノーベル」で販売している。震災で分娩舎や繁殖豚舎など5棟が全壊。母豚も100頭ほど淘汰した。約1億円を投資し、これを機に老朽化した豚舎を増改築して、現在は震災前よりも母豚を増やし、スリーセブン方式（繁殖豚をグループ化して3週間分まとめて人工授精するシステム）を採用して、省力化と生産効率の向上を図っている。新しい豚舎ができるまでは母豚を肥育豚舎に移し、建設用単管パイプで繁殖豚用のストールを手作りし、母豚にストレスのかからないような環境をつくった。代表は福島県養豚協会会長も務めており、自らの被害状況と復興プロセスを、研修会等を通じて伝えることで同じく被災した仲間を励まし、ともに復興へ歩んでいる点も特筆すべき点である。さらに仮設住宅などへの炊き出しにも積極的に参加し、被災地域の活性化に向けた活動も展開している。



水道管が破損し、母豚が飲水が出来ない状態



翌朝母豚260頭をAOした肥育舎に移動



飼料タンク下部のホッパーが外れタンク内の餌が全て外部に



農場全部のタンク下部が破損



飲水用の配管が破損



暖房用のガスが使用不可に

取り組み主体区分：畜産経営-その3



震災時の分娩舎内



現在の分娩舎内



震災時の母豚舎



現在のストール舎

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.